

参 考 図 書 紹 介

ミツバチから見た養蜂

佐々木正己: 養蜂の科学 (昆虫利用科学シリーズ⑥).
サイエンスハウス. pp. 159. 1994. 1,800 円.

本書は長年玉川大学でミツバチを研究してこられた著者らの業績と世界のミツバチ科学の最前線における最新情報が網羅された養蜂家にとって待望久しい好著といえる。

第1章「世界のミツバチ」は新発見の数種のミツバチの紹介を加えながらセイヨウミツバチとトウヨウミツバチを中心に養蜂を成り立たせている彼らの習性を述べる。第2章「近代養蜂を支える技術」では、可動式巣枠、巣礎、遠心分離器の3大発明、人工授精について言及する。第3章「ミツバチ社会機構の人工調節とその生物学的背景」は、蜂蜜の生産、ローヤルゼリーの大量生産、女王蜂の人工養成、人工分蜂、糖液給餌と代用花粉、越冬管理、採餌圏の問題、蜂病対策など幅広く最新知見を取りあげて展開し、ヘギイタダニ対策、オオスズメバチ対策な

ど養蜂家の興味をそそる一章となっている。第4章「未来技術」には、警報フェロモンの逆利用、合成女王物質の実用化、集合フェロモンの利用、ミツバチ群の完全室内飼育、新品種の育成と新技術の導入、最新ポリネーションなどの将来可能性の高い技術を並べ、いよいよ佳境に入り、蜂飼いに夢と希望を与えてくれる。第5章「資源昆虫」ではミツバチの生産物を科学的に詳述してある。第6章「人工管理の功罪」は人工栄養問題、環境破壊問題に言及しており、ミツバチの自然生活力の大切さが強調される。

一読すると養蜂が、自然界で巧妙に営まれるミツバチの生活に基づいていかに理にかなった技術として発達してきたのかを今さらながらに痛感させられる。ミツバチを理解し、得た知識を養蜂技術に取り入れることにより、養蜂経営の進歩に結びつけるヒントを提供してくれる書といえよう。(井上敦夫)

タイの会議録出版

Connor, L.J., Rinderer. T., Sylester, H. A., and Wonsiri, S. Asian Apiculture (Proceedings of the first International Conference on the Asian Honey Bees and Bee Mites). Wicwas Press. pp. 704. 1993.

1992年2月にタイのバンコクで開催された第1回アジアのミツバチと寄生ダニに関する国際会議の会議録が出版された。総計704ページ、4cmを超える厚さとなった本書の白い表紙は岡田一次先生の「仏像とニホンミツバチ」の白黒写真が飾る。

全8章に分けられ、第1章には基調講演2題が、以下ミツバチ生物学(29題)、養蜂(5題)、生産物(8題)、養蜂植物(8題)、ダニ類(18題)、計80編の論文が採録されている。また巻末には、36ページにわたって Crane and Walker によるアジアのミツバチの文献集

(1979年から1991年に発表された516編を集録)を追録しており、現時点でのアジアのミツバチの関連情報源としてかなり完成度の高いものに仕上がっている。

本書の出版を担当した Wicwas Press は、原稿をフロッピーディスクで集めて各論文の体裁をそろえ、読みやすくしている。しかし先進の手法を駆使したにもかかわらず、巻末の索引のページ数が若干ずれてしまった。予定よりも出版が遅れたことも関係あるかも知れないがこんなミスがあったことは残念である。

(中村 純)

* アジア養蜂研究協会では本会議録を頒価8000円(送料実費別)でお分けするので、希望者は協会あてに電話(0427-39-8685)またはFAX(0427-39-8854)でお申し込み下さい。